

ベルマーク新聞 3月号

発行 公益財団法人ベルマーク教育助成財団 東京都墨田区両国3-25-5 JEI両国ビル9階 〒130-0026 電話 03-5638-2320(代表)
郵便振替口座 00100-7-56035 ホームページ <https://www.bellmark.or.jp/>

オンラインで防災を学んだよ

三重・津市立南立誠小で防災科学教室



①画面に映る Dr. ナダレンジャー ②雪崩を再現した実験を披露 ③自分の映る姿を確認しながら授業を進める Dr. ナダレンジャーとナダレンコ ④科学おもちゃの「エッキー」
⑤地震の揺れの周期を学べる「ゆらゆら3兄弟」 ⑥納口恭明さん(左)と鱧優子さん

ベルマーク財団の教育応援隊のひとつ、防災科学教室が、初めてオンラインで開かれました。1月26日、三重県の津市立南立誠小学校(米野浩之校長、児童392人)と、茨城県つくば市の国立研究開発法人防災科学技術研究所(防災科研)がリモート接続され、子どもたちは画面に見入って防災を学びました。

この日は同校PTAがweb会議システムを立ち上げ、1~6年計13のクラスが教室から参加しました。

「私が Dr. ナダレンジャーです」
教室が始まると、金髪カツラにメガネ、マスク姿の怪しい人が画面に登場しました。隣のピンクのかつらの女性は、助手のナダレンコです。

自分たちについてナダレンジャーは「不審者だと思う人は？」と問います。各教室のほとんどの子が手を挙げました。「うわーっ、多すぎ。でも、正しいと思います。これはオンラインなのでみなさんの前にはいませんけど」

ナダレンジャーは、実は研究者で、専門は名の通り雪崩です。この日最初の実験では、1mm程度の発泡スチロールの粒を、傾けた竹に流して雪崩を再現しました。粒は、おたまじゃくしのように頭でっかちな形で流れます。

最初にほんの少しの粒を、直後にたくさん粒を流すと、大きなかたまりが小さな粒を飲み込みました。粒の量が増えれば、スピードが上がるのです。量が増えれば、流れの威力はどんどん大きくなります。「楽しく見えるのは小さいから。巨大化すると怖い災害になります」とナダレンジャー。

強調したのは「自分の命は自分で守ること」の大切さでした。そのためには「学校で習ったことを思い出したり、自分で判断したりすることが大事です」

休憩を挟んで後半、ナダレンジャーは水と砂が入ったペットボトルを持って登場しました。ボトルをよく振って静かに待ち、砂が沈んだところで「デコピン」

すると、カラフルな丸ピンが浮き上がります。まるで手品です。

「これ、やってみたい人いる？」
一斉に子どもたちの手が挙がります。「出来るよ。あらかじめ送ってあるから」
「昨日の日直」と指名された子どもたちが用意されたボトルを持ち、「3、2、1」のかけ声で「デコピン」すると、やはり丸ピンが浮き上がってきました。どの教室も大騒ぎです。

水を多く含んだ地盤は、地震で液化するとマンホールが浮かび上がったりします。この実験では「デコピン」が地震、丸ピンがマンホールの役割です。

地震の揺れの周期も「ゆらゆら3兄弟」で学びます。長さの異なるスポンジを高さの違うビルに見立て、異なるリズムで揺らしてみます。早いリズムでは低いビルが、遅いリズムでは高いビルがよく揺れます。

教室を終えると、Dr. ナダレンジャーとナダレンコは変装を解きました。そ

の素顔は、ともに防災科研の研究者、
納口恭明さんのうぐちやすあきと鱧優子さんもたいゆうこ。雪崩が専門で理学博士の納口さんは、サイエンスショーの世界ではとても有名な方です。

防災科学教室は、財団と防災科研の共催で2018年度から始まりました。通年で募集しており、コロナ禍に配慮したオンライン開催を希望の学校は財団(03-5638-2320)までお問い合わせください。また、防災科研のHPではナダレンジャーの実験動画が公開されています。

たくさんの実験
たのしかったね!!



東北被災地への支援に「感謝状」

岩手・釜石市から財団に届きました

岩手県釜石市からベルマーク財団に感謝状が届きました。財団が実施している東日本大震災被災校支援に対するものです。

釜石市は、復興を支援している団体に感謝の気持ちを伝えようと、野田武則市長の名で感謝状を贈呈することにしたそうです。同封の手紙には「釜石の復興は、これまでに頂戴いたしました様々な支援をなくして、決して成し得たものではございません」と記されていました。

財団は2011年の震災発生直後から支援を始め、そ

の後も毎年、岩手・宮城・福島3県の小中学校に支援を続けています。2021年度も3県の120校に600万円相当の支援をしました。ここには釜石市の学校も7校含まれています。東北全体の支援額は累計5億円超、支援した学校はのべ2146校になります。

今回の感謝状は、ベルマーク運動に関わるすべてのみなさんの思いが、確実に被災地に届いている証です。財団はこれからも、子どもたちの笑顔のための活動を続けてまいります。

